



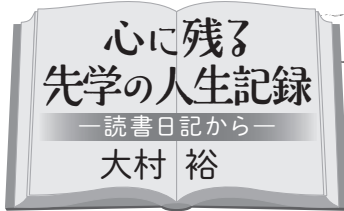
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.221
2022.2.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第26回

中村五郎編『画竜点睛 —山内清男先生没後25年記念論集—』

(山内清男先生没後25年記念論集刊行会 1996年)

から読み解く山内清男の前半生

山内清男博士(1902~1970)は、私が最も尊敬してやまない考古学者である。博士は自分の生涯を回顧するようなことはなかった(研究の回顧はしている)、その一生をトレースすることは長い間困難なことであったが、博士の傍らにあって教導を受けてきた中村五郎氏によって詳細な年譜が作成され、かつて交流のあった研究者たちによる思い出や献呈論文等も併せ、1996年に本書が上梓されたのであった。山内博士の人物像を捉える上で最重要の書籍と言ってよい。今回はこの書籍から山内清男博士の前半生(生誕から東京帝大理学部講師になるまで)を概観し、なぜ孤独と貧窮に耐えられたのかを想像してみたい。

山内清男(やまのうち・すがお)は1902年1月2日、父・素行と母・多真喜の長男として出生。1910年、父親の職場の異動に伴い、栃木県の師藩学校附属小学校より早稲田小学校に転校。ここで後年哲学者となる田中美知太郎と知り合い、終生の友となる。同校卒業後、旧制早稲田中学校に進学。ここでは山内の人生観を大きく左右する恩師に出会う。その名を武者金吉と言う。武者は1891(明治24)年生まれ。早稲田大学文学部英文学科を首席で卒業し、1916(大正5)年に早稲田中学に就職。英語と地理を担当しているが、考古学にも関心があつたようで、1917(大正6)年11月、山内等を千葉県堀之内貝塚に連れて行き、土器片を採集している。本書に収載された高橋龍三郎の略伝(「旧制早稲田中学の記録に見る山内素行・武者金吉」)によると、武者は「直情径行」で「喧嘩っばやい」性格であったという。この一言でも山内清男との類似を想起させるが、この性格が災いしたのか、早稲田中学の一理事による執拗な退職要求で早稲田中学を辞めさせられたという(1934年)。これに対し教職員一同や早稲田中学の上級生たちの猛烈な反対運動があった。この混乱状態は一年間ほど続いていたというから、武者は余程生徒たちから慕われていたのであろう。武者金吉の経歴をもう少し調べてみよう。宇佐美龍夫「日本地震史料の恩人たち—田山実と武者金吉—」(『地震』第2輯32巻3号 1979年)によると、1928(昭和3)年より早稲田中学に在職したまま東京帝大地震学研究所嘱託となっている。ただし無給であったという。早稲田中学退職後は安田学園に就職(～1948年)。その後、文部省震災予防評議会嘱託(月給25円)、早稲田大学講師(地理学担当)、中央气象台、文部省学術研究会議天文学地球物理学情報編集委員(無給)、アメリカ地質調査所職員などを歴任している。なお武者が地震研究を始めた動機と時期は不明であるが、『増訂 大日本地震史料』を復刻した明石書店編集部によると1916(大正5)年頃、地震の発光現象の研究をして寺田寅彦に目をかけられた、とあるので(同書1巻3頁)、山内が早稲田中学在籍時には既に地震研究に携わっていたことになる。

以上、語学が堪能で研究熱心、無欲恬淡とした人物であることがこの経歴からも推し量られる。また山内同様、決して恵まれた研究者人生を送った訳ではないことが理解される。主要著書は『増訂 大日本地震史

料』(全4巻)である。これらは、古代から慶応3年までの地震・火山噴火、および関連諸事象について、当時として知られる限りの史料を原文で収めたものである(石橋克彦「復刻 日本地震史料」の刊行に寄せて)。第1～3巻は資金不足から謄写版印刷でわずか300部ずつ発行された(1941～43年)が、残りの第4巻は種々の理由から刊行が困難となり中絶。その原稿は戦火を恐れ、震災予防評議会幹事今村明恒邸の庭に穴を掘り、亜鉛製の箱に収めて埋蔵したという。なお戦後、毎日新聞社の支援によって未刊であった第4巻が『日本地震史料』として刊行されている(以上、明石書店編集部、復刻版1巻3頁)。その序文には、「この本は本務の傍ら、多額の経費と多くの時間を要したが、この仕事に対して1銭の研究費も与えられず、地震予防協会創立に至るまでは一枚の原稿紙さえ支給されることがなかったのです」とある。従ってこの間の辛酸は名状しがたいものがあり、「編者のみならず家族までが犠牲になった」という(以上、高橋龍三郎の武者略伝から孫引き)。同じ頃(1939年～1941年)、『日本先史土器図譜』を謄写版印刷(「解説」部分)で自費刊行(200部)した山内清男の苦勞を想起せずには居られない。

さて、山内は1919(大正8)年に早稲田中学を卒業し、同年東京帝国大学理学部人類学選科に入学する。この進路選択に対し家族は反対したらしい。東京帝大出の父・素行には、選科生の扱いがどういふものか(学内では種々の差別があつたという)、修了後の進路にどのような困難が待っているのか(「学士号」を貰えないので、大きなハンディを背負うことになる)分かっていただからであろう。選科修了後は東北帝大医学部副手に就任。9年間ここで頑張るが、直属上司の長谷部言人との折り合いが悪かったかして1933(昭和8)年に依願退職してしまう。この後は「パピルス書院」という横書きの原稿用紙を販売する店を立ち上げるが、「士族の商法」が災いして失敗。1943(昭和18)年に東北帝大医学部の解剖学教室助手(～1945年)になるまで、父親の教科書の印税の一部をもらって生活していたという。この間、先史考古学会を立ち上げ、機関誌『先史考古学』を刊行したり、『日本先史土器図譜』を自費刊行したりしている。当時居住していた東京本郷元町の借家の畳は、歩くと穴があく始末(江上波夫談)で、部屋の一角にはキノコが生えていたという(江坂輝彌談)。定職を持たず、研究に没頭する山内には、将来の生活に対する焦燥や強い孤独感はなかったのだろうか。頻りに甲野勇や後藤守一・大場磐雄宅を訪ねたり(115頁)、人類学教室の酒詰仲男を訪ねたりしていた(酒詰「貝塚に学ぶ」121～122頁)のは、その表れかもしれない。1946(昭和21)年9月に東京帝大理学部講師になって生活の安定を得るまでこの貧窮と孤独に耐えられた原因の一つは、赤貧に耐えながらも学問一筋に奮闘する恩師・武者金吉の後姿があつたのではないかと私は想像しているのである。ちなみに中村五郎の回想によると、「東大の(山内)研究室の書架に『日本地震史料』数冊が並んでいた」という(13頁 括弧中の語句は大村)。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第26回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイスバレット・サイト (第214回)	高山いす美 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第1回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚 「ムシの考古学」	佐藤恒介 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第1回)

山本 暉久

1. 書齋にて

2017年3月昭和女子大学を定年退職して、早くも5年の年月が過ぎ去ろうとしている。一般のサラリーマン生活であれば、定年は60才で、そのあと5年程度は非常勤職員として勤めて、65才で完全にリタイアするのが普通であるのに対して、私は70才まで勤めることができた。都合44年間勤め続けたことになる。

ところで、私の考古学人生を振り返ってみると、私が専門とする縄文時代文化の土器型式編年になぞらえれば、その編年は大きく5期に分かつことができる。早期は、考古学を志して大学に入学し、大学院修士課程を修了するまでの8年間に相当し、多数の遺跡の発掘調査に参加して考古学を学んだ時期である。なお、考古学を志そうと大学を目指した高校時代は草創期とでも位置づけられるかもしれない。次の前期は、そうして学んだ考古学を生かして、神奈川県教育庁に奉職し、公務員として文化財保護行政、行政用語でいう「埋蔵文化財」行政に携わった12年間であり、同時に論文を発表しつつ考古学研究に邁進し始めた時期にも相当する。中期は、神奈川県立埋蔵文化財センターに異動し、そののち設立された財団法人かながわ考古学財団に県職員の身分のまま派遣された時期の17年間であり、考古学の研究も最も充実した時期といえる。後期は、神奈川県職員を辞し、昭和女子大学の教員として定年まで勤めた15年間で、教育と研究に邁進した時期に相当する。晩期は、退職し悠々自適に考古学を楽しんでいる時期に相当し、現在に至る時期である。

このように私の人生は考古学とともにあり、「考古学の履歴書」の題名を「考古学とともに歩む」としたのはそうしたことからである。「歩む」としたのは、過去形ではなく、現在進行形として考古学の研究を継続し続けていることを意思表示したものである。今回の連載は、考古学研究所アルカの角張憲子さんの懇意によるもので、私如きが偉そうに自身の「考古学の履歴書」を書き記すことにはいささか躊躇したが、ご笑覧いただければと思い、この私の考古学研究の編年に従って連載させてもらうことにした。

第1回は、今現在(晩期)から話を始めよう。大学での15年間は研究室をあてがわれ、10年間は、同僚であった菊池誠一さんと同室で過ごし、その後5年間は一人部屋となった。そして退職するに際して問題となったのは研究室に置いてある膨大な量の考古学関係の書籍(報告書や研究雑誌など)をどうするかということであった。私は、図書館に通って考古学関連書籍を読むのではなく、自分の研究室自体を図書館化するために多数の考古学関連文献を収集することを心がけてきた。そんなことから膨大なこれらの書籍を置き去りにすることもできず、もちろん大学図書館が引き取ることも拒否されているので、研究室を明け渡すにあたって、全てを運び出さなければならなかった。さて、これらを我が家へと運び込むことは、スペースの関係と到底無理、我が家であてがわれている8畳の書齋もすでに満杯で、仕方なく自宅の庭先にユニットハウスの書庫を建てて、そこに書齋に入りきれない書籍を収納しているありさまで

あり、どうしたものかということになってしまった。そこで思いついたのは、別に書齋換わりの部屋を求めて、そこに研究所蔵の書籍を移動しようということになった。退職後「毎日が日曜日」となるわけで、同居人から「粗大ゴミ」扱いはされないし、その方が生活のメリハリにもなるだろうと、書齋換わりの中古マンション物件を自宅近くを探すこととなったのである。もっとも、その探索と資金の当てについては、すべて同居人の才覚によるもので、私はそれをお願いしたにすぎないが、なんとか、自宅から歩いて5分ほどの3LDKの中古マンションを購入することができた。そのリビングルームと6畳間の和室(改造して床をフローリングにした)に、天井までの高さのスチール製書架を11棚を据え付けて無事書籍を収納することができた(写真参照)。それもいまや満杯となってしまう、床にはみ出すありさまとなってしまった。なお、私だけがこのマンションを使うのはもったいないので、今は、独身の息子が同居している。



書齋写真

退職後の生活は土・日は自宅で過ごすが、月曜～金曜は、毎朝9時に自分で作った弁当持参で家を出て、書齋に出向き、考古学関係の研究や論文などの執筆に時間を過ごし、5時には自宅に戻るという毎日が変わらない生活となった。コロナ禍の関係でこの2年ほどは、外出はほとんどなくなり、定期的に薬をもらうための診療に病院に出かけることや、退職時に辞めることができなかった外部委員(文化財保護審議会委員や史跡整備委員会委員など)の委員会に出席するくらいとなってしまう、好きな旅行(もちろん遺跡・遺物見学が主)や、考古学の研究仲間や教え子たちとの楽しい飲み会もできなくなっているのが本当に残念なことで、早くコロナが終息することを願ってやまない。これはみなさんとも共通する祈りではなからうか。それでは、次回からは私の考古学研究編年に沿って「考古学とともに歩む」の連載を進めていくこととしたい。

略歴	
1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英之記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁護子先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 214

松本城三の丸跡土居尻 ～長野県松本市

高山 いず美

私が紹介する遺跡は、長野県松本市に所在する松本城三の丸跡土居尻です。松本城は西側に飛騨山脈、東側を筑摩山地に挟まれた南北に長い松本盆地の中、筑摩山地から流れてきた薄川と女鳥羽川によって形成された複合扇状地の末端に位置する近世城郭です。信濃守護小笠原氏の本城・林城の支城の一つ、深志城を前身としたと言われていますが、深志城については不明な点が多く、はっきりしたことはわかっていません。天文19年(1550)、甲斐の武田晴信が松本平に侵攻して以降、32年間にわたって武田氏の信濃侵攻の拠点となり、天正10年(1582)武田氏の滅亡を機に、小笠原貞慶が安曇・筑摩郡を回復し、深志城を松本城と改め城郭の整備にとりかかりました。

松本城の城郭は本丸・二の丸・三の丸の3つの郭と、それぞれの郭を囲む内堀・外堀・総堀の3重の堀で構成され、その外側には城下町が広がっていました。

三の丸は家老をはじめとする役職についている家臣の屋敷地、葵馬場や郡所・作事所などの藩の施設のほか、松本城の軍事防御施設である総堀や土塁、門、馬出などがありました。維新时期以降、土塁は崩され総堀の大部分が埋め立てられ、三の丸地区は松本の中心市街地として開発が進みました。現在は官公庁や商業施設、住宅地などが立ち並んでいます。

城下町一带を含む市街地で初めて発掘調査が行われたのは平成3年、土居尻の第1次調査です。この調査の結果、現地表から1.7mの間に近世の人為的な整地層を4層確認し、武家屋敷の遺構・遺物が非常に良好な状態で残存していることがわかりました。

土居尻は三の丸の西側、西総堀土塁付近の土居尻地区に位置しており、調査中のものも含め現在までに15回の発掘調査を実施しています。これらの調査では、武家屋敷や総堀、土塁といった近世の遺構に加え、松本城築城以前の深志城時代のものと思われる遺構や遺物なども確認されています。

土居尻第9次地点は平成28年10月～平成31年3月まで、内環状北線整備事業に伴い緊急発掘調査を実施しました。調査地は三の丸の西側、外堀南西部付近に位置します。古地図等の記録によると、近世には南北に合わせて2軒の武家屋敷、土塁、総堀、水路が存在していたことが確認できます。発掘調査の結果、古地図の記録とも一致する複数の遺構を発見することができました。

武家屋敷の範囲に当たる調査地北東部では、敷地境の塀の跡と考えられる杭列、柱穴、井戸跡などを確認しました。松本では当時高級品とされた肥前産の碗、鳥の餌入れ(餌猪口)など、武家の生活が窺える遺物も出土しており、屋敷地の存在を裏付けます。



▲調査地遠景(南西から)

調査地西側では、西総堀土塁の盛土基底部と考えられる土層、および土塁裾部に打ち込まれた杭列を確認しました。杭は敵の侵入を妨げる防御用のものと考えられ、総堀の他地点での調査でも同様の杭列が発見されています。

特筆すべき遺構として石組水路が挙げられます。この水路は外堀の南西隅から西総堀に繋がるもので、外堀の水を総堀へ排水し、外堀の水位調節の機能を持っていたものです。石組には積み方に幾つかの種類があり、その積み方に合わせて水路の幅が異なっていることがわかりました。これは構築時期の違いであり、この水路が幾度も改修を繰り返しながら、長期間使用され続けた痕跡であると考えられます。

正確な構築時期は不明ですが、松本城築城期に造られたものと思われる。この水路は江戸時代を通して使用され、近代以降にも改修をしながら水路として使用され続け、最終的に昭和30年頃に廃絶されたことが市の水道局の記録や出土遺物から判明しました。このように、江戸時代初期に造られた設備が350年以上もの長い間利用され続け、廃絶後に発掘調査によって発見された事例は、全国的に見ても非常に稀であり、貴重な遺構と言えます。調査終了後、石組水路は道路建設に支障のない全体の約7割を道路基盤下に現地保存しました。



▲調査地全景

私がこの遺跡の発掘調査に携わったのは、囑託として松本市に入った平成29年の9月からでした。前年度の調査によって既に石組水路の一部が発見され、現地保存が決まっていた時期でしたが、これまでに近世遺跡の調査経験が殆どなく、城郭用語も知らないことばかりの自分は右も左もわからない状態でした。特に石組水路は現地保存と記録調査の両立のために、どこをどのように掘れば最高の記録が残せるか、遺構をどのように解釈すべきか大変悩んだ記憶があります。関係各位の皆様にご指導・御助言をいただき、どうにか調査を終えることができましたが、松本城の中でも重要な遺構の調査に携われたことは、とても貴重な経験になりました。

現在はこの調査の整理作業を行っています。昭和期のものを含む多種多様な遺物、現場では検討しきれなかった遺構の整理など多くの課題を抱えています。満足のいく報告書を刊行できるよう努めたいと思います。

参考文献:

松本市教育委員会 2018「松本城三の丸跡土居尻第9次調査 現地説明会資料」
松本市教育委員会 2016「松本城三の丸跡を掘る」松本市文化財調査報告No.225
松本市教育委員会 2020「史跡 松本城南・西外堀跡 試掘調査報告書」松本市文化財調査報告No.240

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは古林舞香さんです。

考古者の書棚

「ムシの考古学」

森勇一 著／株式会社雄山閣(2012)

佐藤 恒介

本書のタイトルでもあるムシの考古学とは、一般的には昆虫考古学と呼ばれることが多い考古学の一分野で、遺跡の発掘調査等で出土する昆虫遺体を現生昆虫と比較・同定し、昆虫の食性や生息環境から古環境を復元するものである。発掘調査においては自然科学分析に括られる分野であるが、昆虫遺体の分析を行っている事例は多くない。

そもそも、昆虫とはあらゆる生物群の中で最も種数が多いとされており、地球上で知られているもので90万種を超え、日本国内だけでも3万を超える種が発見されている。また、環境に応じた棲み分けや種分化が顕著にみられ、移動に優れた体構造から環境変化への適応性も他の生物に比べると鋭敏であるとされており、昆虫遺体の分析は古環境の復元には重要な資料となりうるものである。

本書は著者の森勇一が愛知県埋蔵文化財センターに勤務した5年間と、のちの高等学校教師のかたわら取り組んだ研究成果の一部をまとめたものであり、様々な遺跡から出土した昆虫遺体について分析した結果と考察を記載している。その中の1つに、私が住む宮城県仙台市にある富沢遺跡での昆虫遺体分析結果も記載されている。この遺跡は約2万年前の大量の樹木と、たき火跡、大量の石器等が見つかり、遺構面を見つけた状態のまま保存し、地底の森ミュージアムとして公開・活用されている。旧石器時代の生活の様子と、森林の跡を発見当時の状態で見られる唯一の博物館である。この遺跡ではスゲヒメゾウムシ・エゾオオミズクサハムシ等の湿地のスゲ群落と結びつく種群や、クロヒメゲンゴロウ等の水生昆虫、スジコガネ・サクラコガネ等の陸生食植生昆虫、オサムシ科やゴミムシ科等の地表性歩行虫などの計195点の昆虫遺体が見つかり、これらの昆虫遺体からは、モミヤカラマツなどの針葉樹が生育し、水辺の存在と、その周辺にスゲ類が繁茂、地面上には倒木の朽木が横たわっていたことが推定された。これらの成果は博物館でも展示され、復元図の基盤にもなっている。また、亜寒帯～冷温帯に分布するシラハタミズクサハムシ・エゾオオミズクサハムシ等が見つかったことから、当時の気候が現在よりかなり冷涼であったことが推定された。このように昆虫遺体からは様々な情報を得ることができ、具体的な古環境の復元を行うことができるのである。

著者の研究の中で、特に興味深かったのは名古屋市若葉通遺跡及び大毛沖遺跡の事例である。前者の遺跡で発見された中世の井戸跡の中からは8科452点の大量の昆虫片が確認された。発見された昆虫片は大部分が食葉性昆虫であるヒメコガネの翅や胸部・頭部などで構成されており、その他にはドウガネブイブイやサクラコガネの仲間などの昆虫片も含まれていた。いずれも主にマメ科植物や果樹などの葉を加害する食植生の人里昆虫で、井戸内の95%がヒメコガネであった。また、後者の遺跡では9つの土坑それぞれからヒメコガネを主体としたソフトボール大の昆虫の塊が確認されている。ここで多く発見されたヒメコガネとは、多くの植物の葉を加害し、農

業が普及する前は大豆や桑・ブドウ・カキなどの栽培植物を食い荒らす農林有害昆虫として恐れられていた昆虫である。これらの虫塊が井戸や土坑の中から塊で見つかったのは、農民が害虫駆除を目的に採って集め捨てたものであると推定された。井戸や土坑内部以外からもヒメコガネは多く確認されており当時周辺に多くのヒメコガネとヒメコガネが食害する栽培植物が生息していたことがわかる。また、愛知県内の他遺跡においてもヒメコガネが多産しており、栽培が盛んにおこなわれていたことがわかる。このように、当時の害虫と人々との付き合い方がわかる面白い事例である。

人と昆虫の付き合い方という観点では、「昆虫を食べる」という行為も挙げられる。近年では昆虫が将来的に貴重なたんぱく源となるとまで言われており、昆虫食を普及する動きが高まっている。昆虫を食べるという行為は今となってこそ気持ち悪いという風潮を見せているが、現在も食べる文化は残っており、つい最近までは食卓にも並んでいたところもある。ある地域では食べるためではなく、駆除も兼ねて採取し食べるところもある。縁があり、ラオスの少数民族の村へ調査に同行した際には、バッタの仲間やカメムシの仲間、セミの仲間など様々な昆虫を採取して食べていた。また、市場ではタマムシの仲間を数匹串にさし、日本でいうところの焼き鳥のような状態で売っている姿も見られた。聞き取りの中では、作物を食害するから採って食べているという話もあった。先ほど取り上げた著者の研究成果は、害虫を駆除するという目的で採取し捨てたものであったが、特定の昆虫片がまとまって見つかる例などが今後増えれば、駆除に伴った昆虫食などの痕跡も追求でき、当時の人々の生活に昆虫がどのように関わっていたのか詳しく見えてくるかもしれない。

著者はおわりに、「昆虫少年はどこへいった!」というタイトルで自らの昆虫や研究への想いを綴っている。少年のときから昆虫を追いかけ捕まえていた著者は、昆虫考古学の大変さや面白さを述べたうえで、最近では昆虫少年が少なくなったと述べている。著者の述べる通り昆虫考古学は根気が必要な大変な研究である。私が大学の卒業論文で山形県の遺跡から出土した昆虫遺体で古環境を復元した際も、数百にも及び細かな昆虫片を顕微鏡で見つけ、その小さな欠片をさらに観察し現生標本と比較して同定していく繊細で地道な作業が数か月にも及んだ。こういった作業も昆虫が好きだからこそできることなのであると思う。しかし最近では昆虫が嫌い、気持ち悪いという子供が増えており、虫網を持って山を歩く姿も見かけなくなった。昆虫への興味関心が増え、昆虫考古学の研究がさらに進むことを願っている。

アルカ通信 No.221

発行日	2022年2月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL:0267-25-0299 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp